

上から目線のオカン系使い魔が、

魔女の私にやたらと魔力供給をしてくる話

— サンプル —

※二次配布はご遠慮ください。

貴女の為に文字を書く！ ルクラ

## 主な登場人物

### ○ドロゴア

年齢不詳。魔族。

燃えるような赤い髪に焰のような色の瞳。三白眼。

しもべなのに偉そうだが、あなたが散らかしまくるせいであちこち片付ける羽目になっている。

（本編では炎の魔人と描写されておりますが、イフリートをイメージしております）

### ○魔女（あなた）

二十二歳。散らかす天才。ずぼらで大雑把。

魔法を使えば魔力供給をされると分かっているのに、つつい魔法を使っちゃうちよつと駄目な子。生活能力がない。

次の頁からいきなり本編がはじまります←

# 1. 魔女様はずぼら

人里から少し離れた場所にある、深い森の中。まじな呪いによって許可された者以外立ち入れない、魔女の家にて。

この二階建ての家屋の主である魔女——つまり私は、薬草畑を前に仁王立ちをして、瞑目していた。

（——めんどくさい……！）

水やり草むしり収穫などなど。この畑の手入れが終われば、家の正面側にあるもっと大きな野菜畑の手入れもしなければならぬ。それが、面倒くさい。とにかく面倒くさい。やる気が出ない。やりたくない。

「ああ……っ！」

大袈裟に嘆いて、よく晴れた空を仰ぐ。

本当に面倒くさい。手作業なんてゾツとする。

でも魔法を使えば、もっと面倒なことになるのだ。

でもでもやっぱり手作業なんて嫌。ああ、やりたくない。

「……………」

チラツと家の方に目を向ける。正確に言えば、寝室がある方向へ。

（まだ寝てる、よね）

朝が遅い『ヤツ』は、まだ呑気にスヤスヤと眠っているはず。

寝ているならば、魔法を使ってもバレない——はずだ。たぶん。

（よしよし、いけるいける。パパツとやって、魔力が回復するまで

散歩でも行ったらいいんだよ）

楽な方へ楽な方へと流されるのは、私の悪い癖だけれど。今はそんなことを考えもしないまま、ニヒヒツと気持ち悪く笑う。そうして私は、黒いローブの長い袖から、立てた人差し指を出した。

その指で空気中にくるくるゝと円を描けば、狭い薬草畑の上に雨雲が生まれる。

「すくすく育てよ」

やっぱり魔法って最高ですわゝと笑いながら、全自動で行われる水やりを見守る。

やがて、畑の土が満遍なくしつとりと濡れた頃。

こうなったら、草むしりも魔法で——と思い始めたところで。

「よお」

とても聞き覚えのある——けれど今だけは絶対に聞きたくなかった低音が、すぐ後ろから聞こえた。

先ほど水やりをやった薬草畑の隅っこにて。

この二階建ての家屋の主である魔女——つまり私は、湿った地面に膝をついていた。

目の前に立つ大きな男の、これまた大きな手に後ろ頭を押さえつけられて。口を動かしながらも、上目にギロリと睨み付ける。

ピチャ、クチュツ。

ツルツルとした質感の大きな先端へ、丁寧に舌を這わせる。

熱く、弾力のあるもので舌が擦れる感覚はくすぐったいような、気持ちが良いような。そんな妙な感じがした。

足のあわいがじゅんと潤って甘く疼く。

その感覚に身動ぐと、頭上から鼻を鳴らす音が聞こえた。

再び睨み付けようしたところで、強く腰を押し付けられてジュブツ♡と深くまで熱が入り込む。

「ん、ぐ」

軽くえずき、じんわりと目に涙が浮かんだ。

私は呼吸を落ち着けてから、遥か上方にある顔を睨め付けて抗議する。

「……………」

目が合った男は、器用に右の口角だけを上げて意地悪く笑った。そしてその上で、更にこちらに腰を押し付けてくる。

表情から、行動からも底意地の悪さが滲み出している男の名前は、ドロゴア。

私の使い魔<sup>しもべ</sup>——であるはずの、男だ。

縦に長く、厚みのある筋肉質な体と、褐色の肌。

橙色の瞳に、炎のように赤い髪。吊り上がった目尻と、三白眼。

普段の言動から、私には意地が悪そうな顔に見えてしまうが、よ

くよく見れば一つ一つのパーツのバランスが良く、整った容貌をしている。

そして一際目に付くのが、頭部にある二本の角だ。

額の上辺りから生えている黒色の角は頭頂部へと伸び、頭の形に沿うようにして後ろに流れ、最後に少しだけ反っている。

これが同じベッドで寝ているとたまに当たって、目が覚めるってなんの――

「おい、集中しろ」

低くて深みのある声は威圧感すらあるのに、やけに色気がある。

「んう……っ」

些か乱暴に頭を掴まされると後ろに押され、ずろりと口から半分ほど怒張が抜け出した。

強かに舌を擦られた感触に目を細めれば、スリスリと親指でこめ



かみを撫でられる。

「むううゝ……」

私は感じてしまったのを誤魔化すように、瞼を半分下してむすりとむくれた。

宥めるように指先で頭皮を擦られて、思考が蕩けそうになる。

けれどどうにか意思を強く持って、飲まれることがないようにと自制した。

「ちゃんと舐めろ」

「ツぐ、ン、うーっ」

急かすように腰を押し付けられて、軽く喉を突かれる。それに小さく咳き込むと、溢れ出した生理的な涙を熱い指が掬った。

「ふっ、ン、うー……っ」

体格の良い男は、ソコも大きいのだろうか。それとも、この男が

強い雄であるからこそ、生殖能力も優秀なのか。

どちらにせよ只今私の口内を占領しているソレは、顎が外れそうなほど大変立派なもので。苦しい思いをしながらもどうにか限界まで啞え込んでいるというのに、それでも根本までは啞えられていなかった。

なんだか負けたような心地になって悔しいのに、尚もじゅくりとあわいが濡れる。

「……っ!!」

束の間思考を蕩けさせれば、人の機微に敏いドロゴアがククツと喉で笑った。

それに対し、いよいよ本気で腹に据えかねた私は、言葉で抗議するため強く頭を引く。

ずっしりとした熱塊がじゅぽんっ♡と勢い良く口から抜け出て、

先端が唇に触れた。

「あの、ねえ……」

「サボんな」

「あッ、ちよっ」

文句を言っ<sup>て</sup>やろうと開いた口に親指を挿<sup>じ</sup>込まれて、無理矢理開口させられる。

「ん、ぶっ！んうッ!!」

慌てて顔を背けようとしたところで、再び口内に怒張を挿<sup>じ</sup>込まれた。舌や頬の内側、上顎がずるりと擦られる感覚に、ずくんと下腹部が疼く。

「い<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>ない<sup>い</sup>っ、<sup>て</sup>へえ」

「うるせえ。ちゃんとしゃぶれ」

「んむっ！ん、おッ」

なんだその態度は！と叫びたいのに、グツと熱塊を押し込まれてまた軽くえずいた。

苦しさで微かな快楽に再び涙が滲み、そんな私の頭をドロゴアが撫でる。

（ああ……どうしてこんな、畑の隅っこで口淫なんてしなければいけないのか――）

おかしな、けれど悲しいかな慣れてしまった状況に、ターニングポイントとなったあの日の出来事が頭に浮かぶ。

私の生きてきた二十うん年間で、一番の誤算。

そんな大それたことはしてきていないけれど、まあまあでそこそこだった私の人生が狂い出した、出会いの日。

そう。私の平穏な日々が狂い始めたのは、間違いなくこの男のせいだった。

「また考え事か？……へえ、いいご身分だな」

「んう、ううう！んぐツ♡おツ、うえツ」

出来ることなら、「いいご身分つてなによ!? 私はあるたのご主人様でしょ!!」と叫びたかった。だが、口の中いっぱい卑猥なもの詰め込まれているせいで、そんなことは出来るはずもない。

じゅぷじゅぷと音を立てながら勝手に人の口で自慰を始めた男に、剣呑さを孕んでいるだろう私の目は、より潤んでいくばかり。

「こん、によ!」

「はは、変なの。……おーら、早く出してほしいなら頑張れよ」

言われた通りにするのは癪だけど、本当に癪だけど、早く終わってほしくて。

私は、限界まで啞えてもだいたいぶ余っている根本部分を、必死に両手で擦る。

そうして顎が辛いなか、太すぎる杭を必死に舐めしゃぶった。

「ふうっ、うんっ、んぐっ」

「あー……いいぞ」

ぶら下がっている二つの山も大きいものだから、溢れ出す先走りの量も凄いのだろうか。

彼が気持ち良さそうに吐息を漏らす度に、ねばついた液体が喉奥へと流れ込み、熱いものが食道を通っていく。

息が苦しい。疲れた顎がガクガクしている。

必死に頭を振るが、モノが立派すぎてかなりの重労働だ。

けれど一生懸命ご奉仕しているうちに、これで腔内をグチャグチャに掻き混ぜられた時のことを頭が勝手に思い出して、体が勝手に興奮し始める。

昨夜だって、いらないうって言ったのに勝手に人の寝室に侵入して、

勝手に私のことを組み敷いて。この恐ろしく大きいもので長々と私の中を挟り続け、一番奥で何度も何度も熱いものを吐き出した。

鼻から、熱の籠った息が洩れる。私の意思とは関係なく、体が高ぶっていく。

既に、足の間はドロドロで――

私は奉仕を続けながら、自分で慰めてしまいそうになるのを必死に堪えていた。

「ほんと、美味そうにしゃぶるよな」

「んぐっ」

久々に声を聞いたと思えば、腰を押し付けられて喉奥をグツと突かれる。

ごちゅっ、ごちゅっ。開いた喉を何度も突かれ、えずくのにな――  
膣口がヒクヒクと伸縮し始めた。

コプリと溢れた蜜が、太腿を濡らしていく。

「もじもじしちやつてなあ。まんこ、寂しいんだろ？」

「んあう！」

ちがう、と声を上げててもハンツと馬鹿にしたように笑われるだけ。

「ご奉仕してるように見せかけて、口オナしてるやつが何言ってるん

だ？」

「ひ<sup>ちがうもんっ</sup>あうおんっ」

またぐちゅっ♡と喉を突かれて、腰が戦慄く。

意識してキュッ♡と下腹部に力を入れれば快感が広がり、鼻息が荒くなった。

「喉と、上顎、きもちいなあ？でも、お預けされてるまんこは寂しいなあ」

「ん、ふう……♡ちあう……♡」



「ちがわねーよ。これで奥までズンズン突かれて、子宮口をドチュドチュ苛められたいんだろ？ いーつつも俺の腰に足絡めて、もつと♡もつとお♡いっぱい突いてえ♡って甘えてくるもんな？」

「~~~~つつ!! あッ、イ……ッ♡」

限界まで羞恥心を煽られた体は異常なほど性感が高まり、私の思考を白く霞ませた。

勝手にカクカクと腰が揺れて、湿った土で服が擦れる。

「っ、ほんと、お前は……口に咥えていくとかどんだけ好き者なんだよ」

「あ、……あっ、あ……」

呆れたような言葉を吐く声は突き放すようでいて、どこか優しい。

「……そろそろ、出すぞ。気合い入れろよ」

小さく痙攣する己の体に呆然としていれば、骨張った熱い指が頬を撫でた。

そしてドロゴアは、耳を押さえるようにして左右から私の頭を掴み、強かに腰を振りだした。

「ほおらご主人様。ご主人様が大好きな、特濃の魔力の素をどっぷり出すぞ」

「——おえッ!? ん、ぐううっ! う、んっ! おぶっ、うぐっ」

絶頂の余韻に浸っていたせいで反応が遅れ、ごぼっ♡と音を立てて喉奥に大きな先端が入り込んだ。それによって我に返った私は慌てて喉を閉め、次の衝撃に備える。

「ははっ、口まんこドロツドロだなあ? 舌はビクビク痙攣してるし、ご主人様はここも性器ナンデスネ♡」

「ぶおッ♡ んん♡♡ ふーっ、ふーっ! ぶっ、ぐ♡ おぐッ♡♡」

にゆぐ、にゆぐ、じゅぷっ♡

口腔内を突かれる度に、子宮がきゅん♡きゅん♡と疼く。

この先端で強かに最奥をノックされたら——私は大きな声で叫ぶように喘いで、いとも容易く達してしまおうだろう。

だって彼の腰使いは巧みで、既に熟知している私のイイところを、的確に刺激するのだ。

「……っ♡」

勝手に蜜道が蠕動する。腰だってまた、勝手に揺れ出した。

「あー……、ぶち犯してえな……」

ごちゅ、ごちゅ。頭を揺すられながら、腰を掴まれて後ろから貫かれている時のことを思い出す。

閉めた喉を開けると言うように繰り返しノックされ、じんわりと目に涙が浮かんだ。

今度は頭が勝手に、お腹の奥にぶわりと熱が広がる瞬間のことを  
思い出す。

重なり合う汗ばんだ熱い体と、私の舌に絡み付く分厚い舌。ぴつ  
たりと触れ合って離れない唇。熱の籠った、焰ようなふたつの眼。

瞳の中では火の粉が舞うように、光の粒が煌めいている――

『魔女は相性の良い使い魔と伴侶となることがあるんだって』

そう教えてくれたのは確か、先輩魔女だった。

「あー、出る……っ」

「……!!」

どこか夢見心地だった意識が、彼の言葉で現実に取り戻された。

火傷しそうなほど熱い体液が、跳ねる怒張の先端からどぷっ♡ど  
ぷっ♡と吹き出す。

喉奥へと流れ込んだ白濁を吐き出すことも叶わず、私は静かに飲

み込んでいった。

いつものことながら、熱い液体が食道を下って行く感覚が、よく分かる。

鼻から抜けるのは華やかな花の香り。味は甘く、まろやか。

魔力相性が良いからこうであるらしいけれど、私にはなんだかそれだけが、不服だった。

不味い方が良いんじゃない。

この意地悪男からこんな可憐な味のものが出てくるのが、どうにも納得できないのだ。

吐き出されたものが腹に落ちると胃が温められて、じんわりと熱が体に巡っていく。

僅かに減っていた魔力が満たされて、器にたっぷりと充填された。

「ふう。どうだ、満たされたか？」

スツキリとした顔で問いかけてくるドロゴアを睨み付ける。

気が付けば私は、完全に地面へ座り込んでいた。

ローブもワンピースのスカート部分も、泥でぐちゃぐちゃだ。

肩で息をして、必死に呼吸を整える。けれど完全に整い切る前に、私は抗議の声を上げた。

「畑に！魔法で水やり、しただけ!! そもそもほんのちよびつとしか魔力は減ってない!!」

「あーそうかそうか」

こんなことを言っても無駄なのは分かっている。

何せ、こんなことは日常茶飯事なのだ。

この男は私がほんのちよつとでも魔力を使うと、体液交換での魔力供給をやたらと、そうやたらと、してくるのだ。

今から四年前――

私がお師匠様のもとから独り立ちをして、新米魔女としてこの場所に移り住んだとき。

一人だとさみし……いや。色々大変だからと、私はしもべを求めてリビングの床にチョークで魔方阵を描いた。

可愛い一角兎の魔獣や、猫の霊体などを思い浮かべながら「使い魔募集中です」と念じ——『いいぞ』という気配を感じてから「じゃ、面接します！」と呼び出せば。魔方阵の中央に、何故か。

超つよいで有名なヒト型魔族様が現れた。

もちろんこの意地悪男だ。

私はあまりのことにものの見事に腰を抜かし、チョツと数滴だけ、ほんの数滴だけ、チビってしまった。

すると何故かそこで魔族様はスンツと鼻を鳴らし、すぐになつこりと笑うと私に契約を促した。

圧倒的強者を前にした私は壊れたからくり人形にも等しく、おかしな音声を上げながらただ首を縦に振り、思考停止したまま、契約を交わしてしまったのだった。

そこまではいい。そこまではまだ、ただのびっくりエピソードで済む話なのだが――

当時、盛大に猫を被っていたドロゴアに、まんまと騙されていた十八歳の私うら若き乙女は、なんと、『必要なことだからね』とニコニコするドロゴアに、まんまと処女を散らされてしまったのだった。

「じゃ、俺も満足させてもらうか」

「ぎゃ……!!」

がさつに右足首を掴まれて、土の上に転がされた。

そしてすぐに、ローブの前面をバサリと左右に開かれる。

更には手際よくワンピースの裾を捲り上げられ、のしかかられて。



下着の隙間に、熱いものが入り込む。

「ぎゃあ！なんでまだ硬いのっ」

「ああ？俺をそこら辺の単発ふにゃちん野郎どもと一緒にすんな」  
蜜濡れの秘裂を往復する幹は硬く、見えなくともバツキバキにな  
って血管が浮いていることだろうと分かった。

最初の頃は中が裂けないようにとやたらと時間をかけて指や舌で  
広げられたが、今では濡れてさえいればすんなり入る。

最早私の中は彼専用の扱き穴と化していて、えげつない大きさと  
強度のソレを、喜んで咥えるのだ。

しかも四年もの間毎日のように執拗に犯され続けているせいで、  
この男曰く、私の中は完全にこの形になっているらしい。最低だ。

「また考え事か。んー、まあ、とりあえずいれるぞ」

「えっ、ま……!!」

ぐいっと更に下着を横にずらされて。一切の慣らしが無いままに、ズヌツ♡と先端が入り込んでくる。

「おッ♡♡♡おっくくッ♡」

「あゝ……キツキツのトロマン、さいっこう」

敏感な内壁を擦り、割り開きながら突き進んでいく熱塊に、散々慣らされた体が即座に天辺に打ち上げられる。

「きちゅツ♡ならし、なっ、キツツ♡うんくっ!!♡♡」

前戯無しで振じ込まれる強烈な快楽に完敗し、私はぶしゅっ♡と潮を吹き出した。

更には悪戯にゴリゴリと浅いところにあるイイところを先端で挟られて、喉を反らす。

「おあっ♡おおおっ♡おち、んぽ♡ぎもちツ♡♡♡」

蜜道を隅々まで満たし、ずりずりと擦りながら前後を繰り返す肉

杭。親しみ深い感触が的確な強さでイイところを擦り、私はビクビクと足を痙攣させる。

「口ではイヤイヤ言っても、体は正直ってな」

「んんっ♡んううっ♡ふあ、あっ♡」

私の体にのしかかる体は燃えるように熱く、触れ合った肌がじわりと汗をかく。

彼を受け入れている内部も熱に侵されて更に感度が上がり、ずっときゅんきゅん♡と蠕動していた。

「お前の大好きなここ、浅いところ。先端でゴリ、ゴリってしてやるよ」

「——おッ♡♡」

ごりゅっ♡ぐぢっ♡ぐりゅうつ♡お腹側の浅いところにある泣き所を、大きな先端で苛烈に抉られる。

私はむずがるように頭を振り、冷たい土に後頭部を擦りつけた。

「ご主人様はここをゴリゴリされて、無様にビューって潮を吹くのが好きだもんなあ？」

「ひああッ！あーッ！あああッ♡そこっ♡そこおっ♡♡」

だから吹けよ、と言わんばかりに執拗にそこを狙われ、刺激される。奥からどんどんと粘ついた蜜が溢れ出し、聞こえてくる水音により酷くなっていた。

「大好きな使い魔ちゃんぽでおまんこゴシゴシ♡嬉しいなあ？」

「ああッ♡んあッ♡うれし……ッ♡もっ、れちやうッ♡また、びゅーって、しちやうう……！」

切羽詰まった声を上げる私を見下ろし、ドロゴアが楽しそうに笑う。

「ははっ、ド変態が。……たつまんねえ」

「お……ッ!? あああっ!!」

突然ズンッ!と奥まで突き入れられた熱に、私は大きく背を反らした。

お腹の奥まで大きな肉杭を埋め込まれ、隙間なく隘路を満たされて。その熱さと悦楽で脳内が白く霞む。

「っ、は……っ、よかったな、奥まできてもらえて。ほら、まんこを隅々までゴシゴシ磨いてやるから、さいっこーに気持ちいい状態で吹けよ」

「お、おッ♡おッ♡おまん、こ、きちゅいッ♡♡」

本格的に、律動が始まってしまった。

逞しい怒張は奥をドチュンッ!と突いてから内壁をゾリゾリとこそぎ、一気に抜けて行く。

そして再び押し入り、先端でごりゅうッ♡と浅いところを抉った

——と思えば、またどっちゅんっ♡と最奥を強かに突き、再び抜けていく。その繰り返し。

「ふっ、ああああ……っ！」

「はっや♡ざっこ♡もう吹いたのかよ。そんなに雑魚くて、恥ずかしくないのか？」

たまらず潮を吹けばニヤニヤするドロゴアに見下されて揶揄われる。それを屈辱に思うはずなのに、何故か快感は増すばかりだ。

「んうーっ♡♡ああっ、あ……ッ！」

「っは、はあ、……っ、ははっ」

どちゅっ♡どちゅっ♡と重い一撃を繰り返し与えてくる熱塊は的確に子宮口をノックし、その奥の部屋をググッ♡と押し上げる。

ヒクヒクと戦慄く蜜道が最奥からの快楽でキツく締めまり、私はガクガクと全身を痙攣させていた。

下から何度も透明な液体を吹き出し、何度も襲い来る絶頂の波に舌を突き出す。

「魔族のなっがい極太ちんぽを根元まで飲み込んで、奥の口で先端にちゅうちゅう吸い付いて♡とんだ淫乱だよなあ？ご主人様♡」

「んゎッ！ああッ！またイぐッ！また、イぐのお……ッ!!」

子宮口を先端で捏ねられ、子宮ごと押し上げるように圧を加えられる。それから、子宮がひしゃげたまま動きを止められて、私はあまりのことに両目からボロボロと大粒の涙を溢した。

苦しいほどの快楽が絶えず流れ込んで来て頭が真っ白なのに、体はどこまでも正直で——私の足はドロゴアの腰に絡み付き、腰は「もっともっと♡」と強請るように、はしたなく揺れ続けていた。

「イけ。おら、イけよ。みっともない顔を青空の下に晒して、快楽に弱すぎなまんこをきゅんきゅん甘く痺れさせて、まんこで使い魔

の精液を乞いながらイけ」

バチュツ♡ゴチュツ♡ずちゅんツ♡どちゅっ♡♡

「お、んくくツツ!? あ、らめっ! ら……ツ♡♡おおくくツ♡♡」  
止まっていた律動が再開されたと思えば、それはまるで追い立てるようにとっても激しくて。私はガクガクと揺さぶられながら、瞬時に快楽の渦に飲み込まれた。

「イ……ツ、ぎゅっ♡♡イ、ぎゅうくくツ!!♡♡」

いいところをたつくさん擦られて、私はあっという間に法悦を極めた。

「はーっ、きもち……」

締め、震える内壁を更にズリズリと磨かれ、蜜壺を耕されている内に、幾重にも絶頂の波が重なり――

「ふ、ぎ、い――くくくツ!!」



ズドンと重く、深い——いつそ大きすぎるほどの絶頂がやってきて、私の全てを飲み込んだ。

見開いた視界は涙で霞んでいるはずなのに、チカチカと光の粒が弾けては、また光る。

「っふー、はあ、は……っ」

そんな中でも、私を揺さぶる動きは止まらない。制止の声を上げることも出来ないまま、私はまた、階段をかけ上っていった。

「イけ、イけっ♡♡クソ雑魚まんこ耕されて、セックスさいこっ♡っ  
って思いながらまたイけ！」

「ぶおっ♡♡ぶおっ♡♡あッ！ンあッ！や、イ、ぎゅうううっ♡♡」  
言葉で辱しめられながら、何度達しても早くまたイけと責め立てられる。

そうしている内に思考が『イきたい』と『いく』で占められてい

き、全力で背を反らしてビクビクと体を痙攣させる私は、ただ喘ぎ、揺さぶられることしか出来なくなっていた。

ぼちゅっ、ぼちゅっ、ずちゅっ。力の籠る体に尚も快楽を叩き込まれて、再び一段と深く、重い絶頂に墜ちる。

「あッ、イ——イツ、ゾ……ッ!! おおおッ♡♡」

「あー、しまる……」

ググッ、と奥まで捻じ込まれた雄を、蜜道を使って全力で抱き締めて、私は頭が馬鹿になりそうな快楽を極めていた。

あまりに気持ちが良くて、腰から下が溶けてしまいそうな錯覚に陥る。

しかし、そうしてうつとりと快楽の波に身を任せていると——束の間止まっていたドロゴアの腰が、再び揺れ始めた。

「一回、出すぞ」

「……あえッ!? おおッ♡ いやあッ!」

達したばかりの体に襲いかかる、射精するための激しい律動。荒々しくめちやくちやに揺さぶられて、目の前で火花が散る。

「舌。舌出せ。しゃぶってやるから」

「んんう……っ! あ……、んっ♡」

ガツガツと体を貪られながら、ぬろりと唇を舐められる。

口では冷たいことばかり言うのに、その感触はどこか優しくて。

ちろりと上唇をひと舐めされて、私は口を開いた。

「ふあ……っ♡ん、む……♡♡」

「ん……」

熱い舌が口腔内に侵入し、ぬるぬると好き勝手に柔い粘膜を舐め回す。

くちりと触れ合った舌が痺れるような快楽を生み、私は夢中で彼

の舌に自分のものを絡み付けた。

「はっ、ほんと、ど淫乱」

口付けの合間に辱められるが、その声は甘い。

その上、地面で汚れるのも構わずに彼は私をぎゅうぎゅうと抱き締めて——熱烈な口付けと抱擁を受けながら、私は揺さぶられ続けていた。

「あー、くそ。せつまいトロまんて必死にしゃぶりつきやがって……ああ、くっ。そんなにお望みなら、なあ？ いっちばん奥で、大量に射精<sup>だ</sup>してやるよ」

「うん……っ♡うんっ♡あっ、ああっ♡」

唇にちゅっ♡ちゅっ♡と啄むような口付けを落とされながら、限界まで押し込まれたものでグッ♡グッ♡と最奥を押される。

私はドロゴアの腰に足を絡めて、広い背中に腕を回した。

こちらからも、彼の薄い唇にちゅうっ♡と吸いつく。

「だしてっ♡いっぱいだしてえ♡」

甘えるように何度も口付けて。至近距離から橙色の瞳をじっと見つめる。

焰のように揺らめく瞳は、キラキラとしていてもきれいで。

私が目を合わせたままゆるりと笑い、また自ら口付ければ、その瞳の奥がギラついた。

「っ、この……っ、はあ、ったく♡」

「んんううっ♡♡ドロゴアあっ♡♡」

自らも腰を揺すって、その時を待つ。

魔族の中でも炎の魔人と呼ばれる種族のドロゴアは、人より体温が高く、体液すらも熱い。

決して火傷をするほど熱いわけではないのだけれど——それでも

そんなものを胎内へ吐き出されれば、たまらないのだ。

毎回毎回、最奥で出される度に私は大袈裟なほど盛大に達して、そのまま暫く返戻ってこれなくなる。

だって、ずっと、子宮の中が熱いのだ。

そうして今ではもう、それがクセになっている。

口ではいらないと言いながらも、その快樂が忘れられない。

「はやくっ♡はやくだしてえ♡あついの、ちようだい♡♡」

今となってはもう、脳内は桃色一色で——私は快樂を与えてくれる相手の首に腕を絡めて、縋りつきながらおねだりを繰り返す。

ちゅっ、ちゅっ♡と音を立てながらすべすべとした褐色の頬に口付けていれば、ドロゴアは微かに目尻を垂らした。

上気した肌をもっと熱い肌で熱せられ、布越しに背中に触れた湿った土がひんやりと熱を冷ましてくれる。

「お望み、通り、一番奥で出してやるよ……！」

「ああッ、アッ！はげし……っ♡すごいよおっ♡どろごああ♡♡」  
追い上げるようにしてガクガクと激しく前後に揺さぶられ、強かに奥を突かれる。下から這い上がってくる強烈な快感に、私はじわじわと背を反らしていった。

ばちゅ♡ばちゅ♡お尻まで垂れた愛液が、重たい二つの山に叩かれて音を立てる。

私のお腹の中を陣取る膨張した熱塊は、限界を訴えるかのようにビクビクと震えていた。

「くっ、出る……！」

「あ……ッ!? あああッ！」

ガツンッ！と一際強く奥を突かれ、子宮を強く圧迫された状態でドロゴアの動きが止まった。

先端が口付けた子宮口に、熱いものがかかる。

「あひ……っ！アッ、あっ、ああ……ッ!!」

「ふーっ、ぐ、はっ、……っ」

入り口の小さな隙間を通って、熱い肉杭よりもっと熱い液体が噴出された。

ドプツ、ドプツと多量に吐き出される白濁は胎の奥へと落ち、敏感な粘膜を刺激しながら内包した魔力を私の体に流し込む。

「ひっ♡♡ン、あ、あ……ッ♡♡」

最早何が何だかわからないが、とにかくお腹が温かくて気持ちがいい——♡

未だにびゆくびゆく♡と吐き出され続けている精液でどんどんと小部屋が満たされていき、その幸福感で目の前が白く霞んでいった。

「おお♡♡おお……♡♡あふ♡♡」



まだ、出てる♡♡

一番奥で長々と吐精される悦びに、私は呆気ないほど簡単に体を極める。

本気の種付けに、私はもう、メロメロになっていた。

「あゝゝ、出た出た」

「——おッ♡♡」

ずるんっ、と勢いよく抜け出た熱に、ぐるんと眼球を上向ける。

ビシヤッ♡と音を立てて潮が吹き出し、入り口に触れている怒張にかかった。

「マーキングかよ」

「ああ……、あ……」

揶揄われるが、当然反応なんて出来やしない。

鼻で笑ったドロゴアは、ぐったりと仰向けに寝転がる私のことを

満足げに見下していた。

「もう一回するか？」

「や、やつ」

『とりあえず一回出すか』と言って出したドロゴアは、まだやりたそうにしていた。

けれどこれまでの経験上、更にもう一度となると今度は出すのを勿体ぶられて、彼が満足するまでかなりの時間を付き合わされることになるだろう。

「やあ……っ」

「はあ、しょうがねえな。一旦ここで止めといてやるよ」

弱々しくふるふると頭を振る私を見て、諦めてくれたようだ。

手を引かれて、私は促されるままに座り込む。

それからいそいそとはだけた服を直されるが、背面はどこもかし

こも泥まみれで。整えてくれたところで、あまり意味は無かった。

「あゝ……、風呂行つてこい」

髪に付着した泥を取ってくれていたドロゴアも、やっと不毛だと気付いたようだ。

指先で頬を軽く払われて、そこにも泥が付着していたのだと悟る。

「草むしりはこの俺がやっというてやるからよ」

「……はああ」

相変わらずの上から目線にも、最早つつこむ気力はない。

体の火照りが落ち着いていくと共に、濡れた服が体温を奪い始める。

ぶるりと一度震えた私に、一足先に立ち上がったドロゴアが、パンと払ってから手を差し出してきた。

早くしろと視線で急かしてくる橙色の目を睨み返し、私は渋々彼

の手を取って立ち上がる。

ちよいちよいと前髪を整えられるが、そこだけ整えても他が壊滅的に汚れているのだからやっぱり意味はない。

すいと右眉だけ上げて些か不満そうな顔をしたドロゴアが、顎でクイツと家を指す。

「……………」

「あ？ いでッ」

私は、傲慢性悪性欲魔人の腹にグーパンチを一発ぶち込んでから、踵を返した。

腹筋が硬すぎて、手首が僅かに痛んだのは内緒だ。

（サンプルは以上です。ご拝読ありがとうございました！）